



みんなわくわく！ 学校わくわく！ ふるさとわくわく！

「わくわく！」 第9号



令和8年8月27日(木)発行

(本校ホームページQRコードです。給食、学校生活ログ等をご覧ください。)

第2ステージでは 「しあわせの島」を創ろう！

長い夏休みが終わり、いよいよ第2ステージが始まりました。第2ステージのメインは何と言っても「運動会」です。

「運動会」では、大きく分けると、徒競走など自分自身の力を最後までふり絞って限界に挑戦する、「個人種目技」と、みんなで力を合わせて一つのものを作り上げていく「集団表現技」の二つがあります。

もちろん、きびきびとした動きが要求される集団行動等も身に付けたい力の大事な部分です。

そこで、第2ステージ始まりの会と運動会の結団式において、「個人種目技」と「集団表現技」にちなんだ話をしました。



初めは、「個人種目技」に関して、元プロ野球選手でスポーツ解説者の「上原浩治」氏の背番号「19」にまつわるお話です。

上原浩治氏は、大阪体育大学、巨人を経て、メジャーリーグではオリオールズ、レンジャーズ、レッドソックス、カブスなどで活躍しましたが、背番号はずっと「19」をつけています。

彼は、高校時代は、エースではなく控え投手でした。ですから、第1志望の大阪体育大学の推薦枠をもらえず、一般入試で受験しますが失敗します。浪人してもう一度受験することを決意し、予備校に通いながら朝から晩まで猛勉強をします。勉強が終わるとジムでトレーニングを積み、さらに家計への負担を減らすために夜間の道路工事のアルバイトもこなしました。

この間の努力は、「人生であれほど燃えた一年間はない」と言っています。

翌年、再度受験し合格し野球部に入りました。甲子園出場経験者らがいる中で、彼らがグラウンドを10周走るなら、自分は倍の20周走って、絶対に彼らに負けないという気持ちで取り組みます。背番号は「19」を希望します。大学受験に失敗して浪人生活を送った19歳の一年間を忘れないという意味が込められています。その後、プロ野球、巨人でもメジャーリーグでも40歳を超えても活躍しました。どんなに苦しいときでも、背番号「19」を見ると、19歳の苦しかった頃を思えばなんてことはないと思えるんだそうです。

上原氏は、この経験を「雑草魂」と名付けて座右の銘にしているそうです。

走るのが得意な人も苦手な人も、自分の中での新記録を目指して最後の瞬まで歯をくいしばってがんばってほしいと思います。

次は、「集団表現技」に関して、昔、国語の教科書に載っていた「しあわせの島」というお話です。

ある島に住む人たちは、怠け者ばかりでケンカばかりしていました。やがて食べ物もなくなってきて、さすがに島に住む人たちは心細くなってきました。

みかねた一人の老人がみんなに働くように言うのですが、誰も老人の話をまともに聞こうとはしません。

そこで老人は、「しあわせの島」の話をします。そこはケンカがなく、食べるものや着るものがたくさんある、すばらしい「しあわせの島」です。

島の人たちは老人にその島へ連れて行ってくれるよう頼みますが、そこに行くにはいくつかやらなければならないことがあると老人は言いました。

それは、
「一つ、ケンカをせずにノコギリを作ること。」
「二つ、作ったノコギリで木を切り、みんなで船を造ること。」
「三つ、自分たちで作った米をみんなでその船に乗せること。」
「そして四つ、自分たちで織った布を使い、服を作り、その服を着ること。」

島の人たちは、初めは嫌がりましたが、次第に力を合わせて「しあわせの島」に行く支度を始めました。そして、10年が経ったある日、「しあわせの島」に行く支度ができたので、「しあわせの島」に案内してもらおうとみんなで老人の所へ行きました。

ところが、老人はすでに亡くなっていて、その枕元には島の人たちに宛てた手紙が置いてありました。その手紙にはたった一言

「もうどこにも行く必要はない。ここがしあわせの島だから。」

と、書き残してありました。

島の人たちは、みんなで顔を見合わせました。そしてすぐに、みんなで協力して力を合わせて働いたおかげでこの島が、「しあわせの島」になったことに気づきました。

子供達には、運動会をとおして、みんなで力を合わせて協力し、一つのものを作り上げるときの喜びと心地よさを体感してほしいと願っています。



新しい先生の紹介

9月1日から、教員業務支援員として赴任されます。

河津晴美(かわづはるみ)先生です。よろしくお願いします。

<めざす家庭・地域像>

笑顔と元気がいっぱいの家庭・地域！ 安心して生活できる家庭・地域！ 子どもの夢実現を支える家庭・地域！